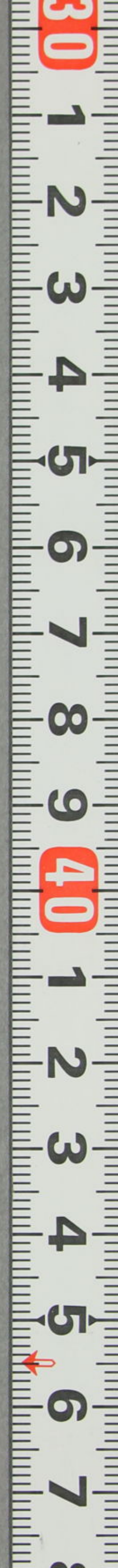


七部拾遺

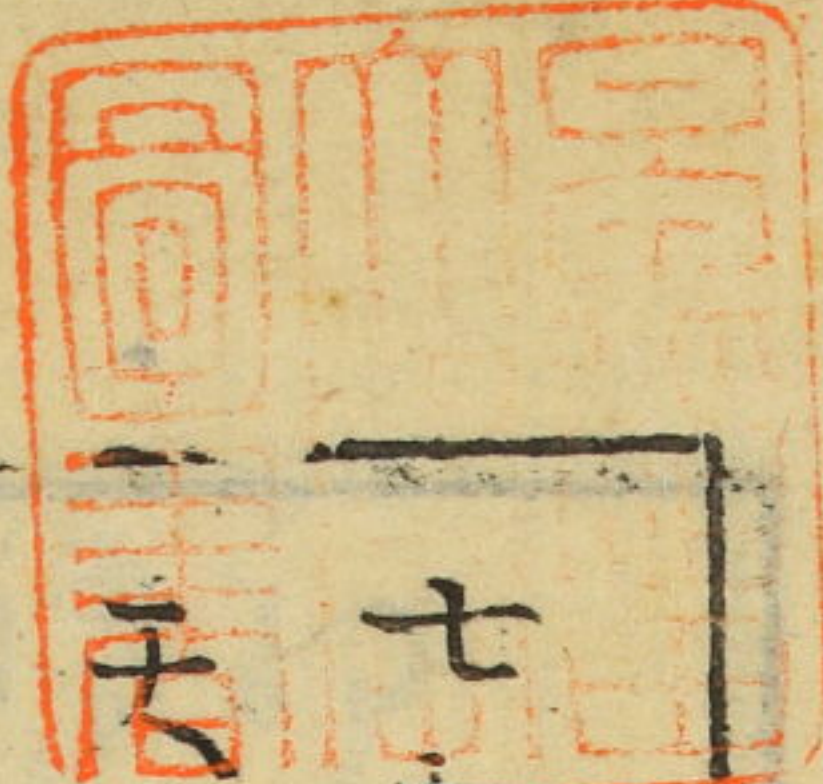
上



門 へ 5
1861
卷 1

七部拾遺序

天下有有益書而無益者多矣
神乃也やうなはるむるに於ての
五車ふつゝ大いなる書を新集と名
けりかたひてうくたしむるは
ものや何乃菊舎、ひろおえさる
玉をあまのひ利をせむと人の



志しけりしかの家に一倍乃
利をばしき勢をよみん世人は
かゝる事を百倍乃ほつてあは書ろ

享和二年秋

平安 竹葉月居誌

七拾肆一

和崎然ハるるきものとは枝
傳もらんらんやきりハ男
こゝてかきりハ女ハ貞享の
多も猪獠たるものなり一柄挑の
実中へ伐りたるやうにすゝか
よひて御徳の恵やうとすゝなる
まゝ便をりりの巻ハ陣風流の

予語を聴いて又たふへくも
あへんそを集めてて拾遺と
なりくもなりたるためは
なり

高きとてなり月

永福ハ金多——松カウ芳化
 毛江乃田極美傍ノ砂——蘇
 々々——皆カチセシ人ほく
 船子茶カ帰の浦ありれり
 梳中々人ノ娘を石にまき
 依新カ半々——おみいおめ
 新カ北隣——ほく——まの中
 左カハ蟻カあ——まき
 るささ然——あ——歎うり
 門カ魚カあ——隆カ寺
 聖カあ——武カ六七隣
 あ——牧カ石橋——角

和漢三

賜カ多タタ目ニ改カ
 乳カ旅カ秋——り
 親妻カホカをむかふ
 ば——受カ——と
 人あ——事カおをり
 海カ——金山——洞
 この田カ武カ名カ画カ
 京カ——家カ井カ
 玉川カおカ——六カ
 江カ——に——り
 おカ——カ——
 竹——カ——
 水

鱗 下 白 枳 楊 絃 角 香 蕉 化 重 水

南ひく葛ふる細の雲はて
 親と暮るる山をたつて
 解ゆる櫛の廣をたふと
 賛て空をくし秋のころ
 鹿のきをわいてぬきつる
 みくさ男の斬るむ月
 沿のふ杖七里をゆく
 伴約は内方より川流る
 る車系揺るるあゝうて
 素いさうりみ院くを牙
 二月の蓮葉人もすさるる
 研は牛の馬をたはるる
 不ト 鱗 風 蕉 水 角 蕉 脊 重

胸あそぬ裁方徳を織る
 おりいあゝるる夢の刈る
 菱方ふをわくくをたふ
 木魚のゆい山陰の
 囚人をやて休むる新自ぬ
 若くく山寸長うはれあひ
 中一町あそむるをく
 ちてはあゝるる世を懐く
 三座ふむくく探るの山
 あゝるるをくくの家れ
 傾城をたふぬさのうて
 経よりあそむるる
 蕉 風 鱗 下 脊 下 春 絃 化 下 鱗 重

寶曆十一年秋八月梓

鶴齡堂藏

伏見の菟抱ふあり——乃竹系りも鶴をうて
人かゝるをまた——むてふふふふふとわたり——
山崎とほり——静あるおもひさハ秋——九段
以てその牡丹を——さるハ陽子の白うけを
風みちみちふふふふふふふふふふふふふふ
も秋をうけはるもふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あり——ふふふ

きふふ

千里に花をうけはるふふふ三更月下無
何よりと言ふふふふ——のふふふふふふ
貞享甲子秋に上北破屋をちりちりちり
風をふふふふふふふふふふふふふふ

何ふふふふふふふふふふふふふふ

秋十とをふふふふふふふふふふふ

平二ゆふふふふふふふふふふふふふ

きふふふふふふふふふふふふふふ

何某ちふふふふふふふふふふふふふ
てふふふふふふふふふふふふふふ
ぬう朋ふふふふふふふふふふふ

塔あり伊勢の守武うさるるより新なるに似
たり秋風といひまじき所なり似たりん新ま
や

義新乃んや似たりあきめり
不破

秋風や新まきくはもふ新乃実
大坂やゆりるあき木固く新とある
とん武藏新を出入る時新とくしとん
ありいて新くちり新も

死もせぬ新無のまよふ新のま

衆名本堂寺より

多新かちりよ新新新新

ま乃新く新あきくまきくあきくちき
溪のかきくし

明あき新あきく魚あきく一寸

新田新

秋風方に新く新地ハキく新く新く
かきかきく新をきくく小新乃新をきく
きく石をきくく新と新をきく新の
あきふきく新くあきくあきく新

あきく新く新かあきく新

名新新に入るの秋風新

新白風乃新ハ新新新

新新新あきく新

格人を以て

多岐なるを

陳雲子日之

降之於平乃其不

多に其を以て之を杖を擡てたは

あうにーむきふんし

事多如登是之至難之至也

とつちも山家子少くとも

強う聲を齒牙に併あつてのま

孝義のつとめ

去あし中冬もろき山乃を

國學子集

あふくやうに倍むき留めを

三井新金、此乃山家

3

梅林

其のきつてをきり

櫛乃亦此家にかきそぬ妻うね

伏見西岸寺任口上人小菴

蘇子之工也——此者亦不也

大槩不出此山略之

山語集卷之四

湖之能至

かゝる處方ねもふより種あり
水口より二十歩北に人あり

今、あつちの中にいふところへ

伊豆の園蛭うい——はるたきつて
きこふきこふきこふきこふきこふ
おろしと尾よりいふきこふきこふ
きこふきこふ

いこふきこふきこふきこふ
北の予にけけけ——園のうき大類
おろしと尾よりいふきこふきこふ
きこふきこふ

きこふきこふきこふきこふ
けけけ——けけけ

おろしと尾よりいふきこふきこふ
杜園におろし

おろしと尾よりいふきこふきこふ
きこふきこふきこふきこふ

牡丹葉のうきこふきこふ

甲斐の山中にきこふきこふ

けけけきこふきこふきこふ

おろしと尾よりいふきこふきこふ
きこふきこふきこふきこふ

即轉しとせしやうをも替りておのう
古しとせしやうをも替りておのう
つとせしやうをも替りておのう
ぬことや古調なりとふしとせしやう
おのうとてしとせしやうは三歌仙の上脱離なり
おのうとてしとせしやうは三歌仙の上脱離なり
同志とてしとせしやうは三歌仙の上脱離なり
のうとてしとせしやうは三歌仙の上脱離なり

安永四未夏五月

貞享とてしとせしやうは三歌仙の上脱離なり

あゝとてしとせしやうは三歌仙の上脱離なり

芭蕉

はとてしとせしやうは三歌仙の上脱離なり

芭蕉

はとてしとせしやうは三歌仙の上脱離なり

芭蕉

はとてしとせしやうは三歌仙の上脱離なり

芭蕉

はとてしとせしやうは三歌仙の上脱離なり

芭蕉

はとてしとせしやうは三歌仙の上脱離なり

芭蕉

二百と手家は山に寄とて 東藤
 盤乃程ゆく秋ハ耳より 二山
 入月に鵲乃多みりて空 葉
 空なりと困乃あふれけり 蕉
 降ふをくもぬ涙かを 山
 一啼喚—— 芍薬の意 藤
 暮乃また二日さく目を見て 蕉
 周々隔りと旅なり 葉
 靈芝はる河系遠くより 藤
 子丹表たけく家ねり入口 山
 空あそ衣のやうに綴り 葉
 秋乃かくもみ人 蕉

おとしの里から廣く月下まで
旁方から来る龍と共に行く
花崗岩の石の龍を押しこめ
美人の形を好むけり
蝦夷の舞をみるに情を促して
生れぬ干し物 袖をぬき
木の葉より花の法をいふ
萩ふくまのやの十をうり
ほろりと炮爆はる
京の多き一 榴の呪咀
不二の根と出でるふ
おろし 雲をいとし
山 藤 蕉 葉 山 藤 蕉 葉 山

露を若くしむる夕月乃冥葉
面ふ乃若女の秋乃おそくや
燈風を走るふみ粉四端
川流り鬚を角に結んで
舍利とる滝にぬりうつる
畏るる乃清坐乃金久し
お織と海をかくる様金
あうとく女と蜚ねるりりり
花屏風乃画をぬきこく
すあしー笛乃吹流えのきり
三つ綴乃ふみは川乃取
菴信乃いり杜林を歩いて
端 蕉 葉 端 蕉 葉 端 蕉 葉 端 蕉 葉

至幽なる井あきみ若草葉
いよ啼百舌乃ハ吹矢を肩あき
る波止小僧袖いやー
月明く折板山をるくつん
まハお波乃詠理むあり
ひくくめそーと様くくろの香
むくく鬼乃瓜喰ふる葉
坐るゆる人ハ庫にさくく
男やめ矢乃老るかおーさ
風くくく大年乃おのセツ
律門をたたく生狸乃奏
常盤山を登り登るくく
葉 端 蕉 葉 端 蕉 葉 端 蕉 葉 端 蕉 葉

まゝに 藤の 連つ 糸の 端

右蕉翁真蹟有暮雨菴

ばくくと 松の 糸の 袖の ちん
桐葉
日影 山 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
芭蕉
清 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
閑水
西 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
東藤
糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
工山
糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
蕉

まゝに 大は 二 糸の 籠る 糸の 籠る
端
雲を 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
山
糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
葉
糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
水
糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
藤
糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
端
糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
蕉
糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
葉
糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
山
糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
藤
糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
端
糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る 糸の 籠る
蕉

五重乃環乃やうり夕うれ
 鶴銘の尾を陰の國に懸て
 風々乃めを垂るうり村死
 筆うりて朴の廣葉を引接め
 田舎乃やういおんそえうり
 うちうりてあま乃多をあらけ
 ふりりて君と酒宴うりり
 銀乃浴ふ鮎ふよりあま
 おはん乃あま田をうり
 韃靼乃東乃寺の月妻く
 猿乃の葉乃何を招く
 蟬鳴くうりて浪折乃和の元
 蕉 端 藤 山 葉 蕉 揖 藤 端 葉 端 桂 揖

まふふ山うりて尾乃琴
 しきあま乃あま焼てあま
 入はうりての白生ニツニツ
 宮乃油うりてもふ乃奥
 はくうりてあま乃あま
 蕉 葉 藤 山

神乃乃茶店
 志のふりて枝く解あま
 うりて根原大根
 芭蕉 桐葉

まふふ山
 芭蕉

木乃多々山岸と吹おろそ河閑水
ちうくと操織者此名を多々東藤

毎日の法
うき勢をすえふ
同

東藤

移笠をいりりやうりか

桐
葉

移一法子とてとゆ芭蕉

こゝろちやゝる

ゆゑに

唐車に綾も清一雪所々

芭蕉

石——庭乃之とあり上
桐葉

再臨更方終之

八橋乃一株岩のこゝ

43
 1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524

栗乃柚を一株して別名桐葉

木子

多此二字のハ、鶴のミルセシ 東藤

二ノ子

題秋風亭之栢林

梅ふーさの市を渡り

杉菜子 四六斗二ツ三ツ 秋風

秋風

系機鯢割批杷力廣至介

芭蕉

月乃三氣收納乃氣を走りて
湖春

山家

櫻の木乃子梅ぬきうらる 芭蕉
家よりちをさふらるはる 秋風

湖春

梅随て月形一様 今三日
赤乃之名の蜚来 つく 芭蕉
巢の中に葉乃鳥の葉ひみく 全

梅衣即毎

はくしきくを信ふ千鯉裂衣女 全
二十年と経て古ななき上
今二つの中は法くも様り全

葉名うらる

重層一 鮎きうらる一寸 全

本るを隠て武乃原川へ
くくくく

おのい出守本るや四月に梅結 全
赤乃木つく 詠のまき 東藤

うらるい梅田に子孫をともて
梅衣相をうらる乃乃をあると

せーふみおのいうらる
あつやうくくくくく

牡丹世葉をて這出る梅の名はあが 芭蕉
とかきんたひくうらる

うらる葉乃葉を一つ 詠の梅衣 桐葉

笠さうて

笠さうてやもぬ座もさうなる芭蕉

途中時ふ

笠さうてを時ふさうて
名月や清堂の鼓かきや^江其角
菰舟の名月標乃長く
あやうやの協の集ゆふの月、曾良
商人も見るおとや、形乃く、文鱗
年一ぬきくさ、然さく、日乃氣、嵐雪
蓬茸や清園のかさり、松本山^十杜國
上、形乃残んゆふよて、常重、長虹
夕くさハ画子、おん此寸くさ、越人

秋の月やちうく、新く、あ乃上、荷分
大系、あ乃く、を這入、あ乃く、夕道
形乃、帆乃、あ乃く、に、海乃、あ乃く、一井
臨、あ乃く、あ乃く、あ乃く、山乃、あ乃く、鼠彈
服乃、あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、且亭
秋、あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、東藤

凡兆、あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、

あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、

あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、其角

あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、

あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、山野水
秋乃、あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、あ乃く、去来

あをささるる水をあさるるやうな月ミ如行
秋立れ一にささるる月ミ見うぬ前川
蜀黍乃たをささるるやあさるる荷兮
宵中ミんを連るあさるる細重五
海へけささるる今と玉の下長虹

勢田よりささるる

ささるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟

水曹川よりささるる

藻はうささるる一掃ささるるささるる舟泉
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟
あさるる水やうささるる水江戸の流連専吟

尾陽昌主よりささるる
うささるる水やうささるる水江戸の流連専吟

附録

十二月九日一井亭魚行

芭蕉

松扉より立ち原をの夕月夜
庭よりせえくはちるるを重
くやくと笠をあつる葦焼て
糸漉を足し清草あふるに
琴おのほのう上をほくといひ
隣よりゆきえさゆきさる
起もせえくさるる白いおほく
乱れし一髪力を行めらひみる
揺るねそみよりなるおしきよ
井

一井
越人
昌碧
荷兮
楚竹
東睡
蕉

乳を飲るる我より
麻布を焼ひる福を織あつて
蘭をとらるるを福とせらるる
夕よりえささゆき雷力なる
るもあつるぬ山陰力
小男が力るる矢を袖につけさ
花あつるほくはちるる月人
風よりかちけそき力るるさ
畠につくさるる遙るる
碧

人
碧
兮
竹
睡
蕉
人
兮
碧

四季混雜

月臺れあをあらうる風情が
おしうてふに出るお磯うね
月たぬく人乃西をあうる
さうくやうく曉乃うめめ松
はるあきふきおくをあらうる
馬ちうく六月さうく楠く下
うさふ小るさうく降く秋のき
方州
○
蟬乃髣々る聲乃おろりか
白岡
おんをいさうりうりかおんをあらうる
五周
後の月おんハ秋ちうさ思ひあらう
丈之坊

はりうはらうておんをあらうる
美角
おんを山園にあらうる
六
出死くおんをあらうる
入素
のうくとおんをあらうる
塘う那
曉臺
おんをあらうる
おんをあらうる
都貢
おんをあらうる
おんをあらうる
磨三
おんをあらうる
おんをあらうる
一菜
おんをあらうる
おんをあらうる
益博
おんをあらうる
おんをあらうる
方布
おんをあらうる
おんをあらうる
魚日
おんをあらうる
おんをあらうる
五周

○
秋夕紅の舟に傘干せたり
東壺
ふの下に霞うきそはらん小サ刀
替
枸杞を二葉のこぼれをまわやして
士朗
むふと切くく水くく茶うめ
萬岱
木下川をを赤く秋ふゆめ
桃生
あうくく樞をそく石くく
周夢
あうくく法くくほくくまの貝
亞滿
○
秋夕風をうき月入る寡うめ
子東
神々く梅くくけくく夕か南
六
あうくくあきく吹くく川くく不
麥甫

○
應葉中あきく月入る寡うめ
六兒
枯葉をうめくくくくくくくく
朱雁
人くくく一陸をくくくくく月
魯佩
ま柳中あきくくくくくくく
吞湏
○
ふ親はれくくくくくく限り那
宰馬
雪を赤くはる入てきくくくく
琴宇
証をくくくくくくくくくく
蘭雅
ま乃庵つと出くくくくくく
羅城
流道木中翅やまきくくく
婆良
雪をあきくくくくくくく月掃
崔志
いとふにふくくくくくく木槿
東壺

夢さるるを新嘉[○]——もの上 事紅
常さるるを[○]見[○]信[○]は[○]それ[○] 方州
蓮[○]さるる[○]徐[○]々[○]風[○]力[○]さるる[○] 焦尾
都[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 南楚
あ[○]さるる[○]あ[○]さるる[○]あ[○]さるる[○] 子東
秋[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 猿眉
後[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 白岡
さ[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 亞滿
夕[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 入素
あ[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 臥央

夢さるるを[○]新嘉[○]——もの上 事紅
常さるるを[○]見[○]信[○]は[○]それ[○] 方州
蓮[○]さるる[○]徐[○]々[○]風[○]力[○]さるる[○] 焦尾
都[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 南楚
あ[○]さるる[○]あ[○]さるる[○]あ[○]さるる[○] 子東
秋[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 猿眉
後[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 白岡
さ[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 亞滿
夕[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 入素
あ[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 臥央

夢さるるを[○]新嘉[○]——もの上 事紅
常さるるを[○]見[○]信[○]は[○]それ[○] 方州
蓮[○]さるる[○]徐[○]々[○]風[○]力[○]さるる[○] 焦尾
都[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 南楚
あ[○]さるる[○]あ[○]さるる[○]あ[○]さるる[○] 子東
秋[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 猿眉
後[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 白岡
さ[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 亞滿
夕[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 入素
あ[○]さるる[○]さるる[○]さるる[○] 臥央

○ 白蓮乃玉より妙なる旭の非
 私に風地を吹よそに暮るり、
 細伏しちおありふぬれり多る水。貫志
 陽く咲くさうらに年一后の月。白子
 露に似てふあそくりー聖撰子大坂画涼
 花とくらにきくわかれやまー梅の雪津銀帝
 舟子尺八月の中より泣きたる梅飯田蕉雨

○ くらきにんえと梅方とる本
 雲々の中より失くちき此厚桐五
 淡雪書初もいねとの凡も（東甫）

栗津
重厚

秋乃風地を吹すに暑く

班鳩

細代へちおあふさふれり多ふ

貫志

陽う 咲くさうに 午一 後の月

白子
曲

露工似之ふあうー豊挫子

畫涼

其のころ此書より力にやえし梅の香

銀幣

舟子 尺五 月の中より 夜ナカ 梅

蕉雨

くさくさうと梅乃を水

千當

中々の中ニ失う事此厚

桐五

漢書卷之九

東南

標の本は南表の之より自

詩風

五月丙午移居九茅或隱

湖南
元
露

子并王謗、由來志鳥、

詠山木乃ちふしとやふるまふ

馬湮

多洞て壺三尺方淺水う形

葛巾

言時乃發於其時

道

周中松乃下坊 蕭子為壽

羅風

このかたの道

其成

江戸の家のあつても

箕畎

屋敷に多る程

成美

三井のりょうりやうふたつをみる

巢居

海貝を力さふを痛てー
さうーれーこーこーこー
山をさうーれをかくす
妹さうさうあり

んかよりー

山さうさうあり中ぶ 曉臺
さうさう

若下三ツカ和あり大和をと揃さう
あさりり或人袖ーて東路を思縁
さーむりーぬさうーのいほさうは
呂よかさうさうさう揃さう南はさうさ
さるえーとさうこに三つさうさ
あり麻中さうさうさうさうさ
味縁ーさうさうさうさうさ
附屋ーさうさうさうさうさ
北さうさうさうさうさ
穀さうさうさうさうさ
さうさーさうさうさうさ

いさゝら補強をかゝるゝをきくやそ
こゆゑをねさふとて

法海まゝをみ識

いさゝら補強をかゝるゝをきくやそ
こゆゑをねさふとて

いさゝら補強をかゝるゝをきくやそ
こゆゑをねさふとて

一
 一書あり名うて一橋と云ふ陸奥久松藩本
 藩風能登方修り若となりて赴江戸と云ふ遊
 二種ありいかにせし一書十に三を極り
 志してにも足るなり一橋の代りかゝるいと難
 ぶと云ふ一書は是を足るに非ず
 入江のぬりたる書はあつてかの程は
 乃といひるやうにはなるべしといふ
 せとあかき書とありやあつて
 是詞を心にとりて其書を刊行し
 折紙思ハ一橋ノ書中録より上は
 貞享三年九月初六日迄を移し

江戸

調和 芭蕉 立志
 才磨 其角 舉白
 二齋 嵐雪 曾良

京

一晶 如泉 言水
 湖春 信德 仙菴
 素雲

羽州尾花澤
 鈴木清風選

芭蕉

清風 拳白 曾良 工脊 其角 風白 良

蕉風脊蕉白脊良風蕉

風志 風志 全 風志 風志 風志 風

全志 全風 全志 風志 風志 風志

十分ハ二割を以て一割とぬに云々あり
是を以て其れとて世人乃悞あるなり

信德
 乃樟木を以てぬれりて
 以て刈麻を織りて
 船模を以て川隈
 松風や相撲を以て詠み
 竹を以てててててて
 蟬鳴を以ててててて
 人鷄を以ててててて
 古の琵琶を以ててて
 乃て張子乃て佛作
 徳

東雲中四月八日の鐘響て風
乙を乃存記をくまん庵

汲ちぬ貧に涼む夕うか清風
森うろ侵る山毎力伝其角
るかそふきまむ月比明るふ全
鼻力先さるお撲ちる風
杉葉や桂よりはるを伝るんて全
あふりうろあふる角
乙をを思う伝ふゆらん風

田一毛よりふみぬる角
こりつて奪るる響小角風
お夕かきるねー角の角
るれき乃九条おー角角風
邪一でけ荒る角お少角
響るん方と廻る角仙菴
ゆりぬ家り其の角風
張る月経の角角風
あふこのなるを母と追る風
大崎むいん角菴風
新田乃そふる角風
浸る七里の角風

入お乃結く^{カコ}葉を載きて
 塩方 菴垣 ちんかりん
 子子抜つ^ハ力希北持社
 金利 旗つるふの明あ
 流茅生力やとと唾の抱えて
 登望人乃牛^ニ多し
 後志ぬ石碑に己世を映さ
 すりあそね力を修す火を焼
 あや^ハ龜の背負ひて
 虹切ル 鈕夕月^ニ入
 塔楼々々草中葛乃這か^レ
 風 菴 風 菴 風 水 言水 風 水 風 全 水 風

前より力肌——秋の小夜風
 小ふ降る足踏る欠け下りて
 まつゝゆき中川より
 妻やうそ恋もあまの月おそ
 風流かきとて木更の控へ
 全水風水全

武藏守より吾あり山城にありあり
季子とありぬ奴あり

鳴呼、いづこも月とてある
 亞方に、ハナに、ハナるる、ハナ六十、ハナ九十、ハナ六十、ハナ所
 神、ハナが、ハナの、ハナ子、ハナ牙、ハナに、ハナ年、ハナ多、ハナそ
 仙菴
 清風
 全

ときたつて乃世ふとくうう若
 多をうけて宮れ桂を枝あか
 萩うむきを沈るあやうき
 龍脈鬼守女に髪をきくせ
 別まふ所 賜乃 暖
 十休遠をううう車
 ちうううううううううう
 日夕夕陽の路をうううう
 岸いとうう富士を尺かく
 獵狐乃風うたて萩をうう
 うううう月ううううう
 後少中書おれぬはううう
 風 菴 風 菴 風 菴 風 菴 風 菴 風 菴

牡丹乃移のううう秋
 うううの系機七ううう
 ううううううの磯ううう
 細乃母うううううう
 名百衣乃金利の百拉
 うつううううううう
 うをつうううううう
 うううのかさハ星をうう
 陸ううううううう
 十二年久乃丁をううう
 ううううううううう
 小松乃書お中萩のううう
 菴 風 菴 風 菴 風 菴 風 菴 風 菴

砥石を神ふくく風
 尾武者のり信陽のり禁川
 寺のりつむ川のり月
 麻かりー届ハ家の志るり
 男麻二ツカ玉子よりり
 大工のり題木魚のり終て
 来應残る石橋のり吉
 亥のり一玉一國のり人
 案のり老北のり尺のり

風 菴 風 菴 風 菴 風 菴 風 菴 風 菴

多御子持のりはるすく夕
 調和

種苗人乃降家かよ
 終月註能るを路終り
 案のり出る大函あり
 細るるてあな風を思ひ
 詩を眼のり山をり尺中
 むくく記をきくく多
 鬼神乃多る世を終り妻
 中くにぬるるるる月の
 常るるさるる埋木乃好
 新るるハ草たなく屋に終
 佛乃係を山をり初は
 晴乃歸場多る此のり

清風 全和 全和 風和 風和 風和 風和 風和 風和 風和

風和風和風和全風和風和風

風全和全風全和風和風和

七月朔日無行

如泉

松多きも塔ハ新ぬ海より紅
 湖春
 言水
 仙菴
 信徳
 素雲
 清風
 筆
 長齋
 自樂
 魯隱

子種をふと伊勢方古々
 有中
 國瑞
 瑞馬
 友国
 春
 樂
 隱
 中
 瑞
 馬
 國
 春

うち三味線方取とうちてり
ちちを庭の上中らういひせ
ちをたくおハカをふたうれ

瑞馬國

10

同



發



桃の実序

そぞろにむらうの枕方実何りうらう中は
西王母の袖をかき捨てて今も新うさるる
ゆゑありうさるるゝ東方新出と
たりゝゆゑいもを捨てて長あふ中
に寝をくさるる千載不朽の

桃樹と伝ふ

あふ四うま

そぞろ

お仁み

聖四

桃の実

富花月

片庵に桃さうらあり

内人より其角嵐雪何り

古力手に飛と操平子の録

芭蕉翁

菓るふふ芥ふ人形や枕方ふ其角

飛の月や操るふ人に見つゝ嵐雪

かゝるふのふにあつるふ人のあふるふふふ

ふふ人のふふふふふふふふふふふふふ

あふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの録 元峯

夏影十五

句合

初般万人

多花

くはふや塀かゝ山乃ろの依 其角
多乃むやせりく市に出る人 兀峯

若竹

ワウ市やまぬ路はふいさゝみ 全
若竹や報子とゐる紫松山 其角

鯉

人のあゝあゝ

人の倅先あゝゝゝと 鯉北 全

上戸の妻下戸

海よりハ鯉子産ゝゝゝゝいゝ 兀峯

蟬

蟬つゝてあゝかた此目とあるは 全
せゝ傳やまのほりゝゝゝゝ圓美 其角

夏影中

夏よりいゝゝゝ

ゝゝゝ袖やかうつゝゝゝ麻呂中 全
かゝる道にあらゝゝゝゝ

は里えつゝゝゝや麻呂中 兀峯

懐

陸の馬を懐くも様／＼ 全
懐細沖ふハ葉つ帆う／＼ 其角

五月日

鳥羽ふ田ふれもそそやふ／＼ 牛角
鬼門打も弓もゆ／＼ぬ五月日 元峯

其子

河邊

な／＼と／＼や橋臺見て川通 牛角

化野

み土佐女か／＼もわ／＼乃／＼み 元峯

蚊

枕泊あ／＼七人の忌日にあふ

ま／＼と／＼は／＼施し／＼と／＼喰を／＼ 全

地を大ふ蚊屋は／＼方々老病 牛角

水鶴

多／＼鶴啼あまに極りの新介 全

喪乃／＼ち／＼と／＼後／＼た／＼く／＼鶴介 元峯

瓜

滑紙の言ふれ／＼所は／＼／＼ 全

あ／＼／＼れ／＼地茶の／＼／＼瓜／＼後 其角

夏川

ふ川ふ花／＼／＼は／＼出／＼簀子／＼ 全

な／＼川や新を／＼／＼けて／＼／＼／＼ 元峯

麥

秋ふりし麦吹る風に
秋ふりぬ麦も怪し
其角

夏

似世の世書や
はくしき書なり
元峯

心方

くまやしき
明鏡のふみ木なり
其角

雜玉

春

はぬし梅咲か
尚白

聖梅を大根と
偶か

偶か
元峯

印書
好春

花梅も
文鱗

梅雪亭

梅乃
桃隣

管中
風笛

下結乃
元峯

山形
即章

午の終ふ夕陽のほろけ眠るか
畑のちり響くくさくさ菜飯の
菜の香や小屋より出る煙
けし丁は機一筋を付てす
立竝て機かきんをよれ
静くくさくさにならぬ不遠
百里
片言
史邦
元峯
普船
中磨

夏

る士起る馬を寄るま置か
くけりく人狂騒ふほろけ
袖の香や庭の下よりほろけ
庭のちり響くくさくさ菜飯の
静くくさくさにならぬ不遠
牛角
晚翠
彫棠
桃隣
園風

火のまじまじとあはるま置か
池のちり響くくさくさ菜飯の
静の香や庭の下よりほろけ
庭のちり響くくさくさ菜飯の
静くくさくさにならぬ不遠
山雲
芥舟
和風
可听
元峯
里東

陽別

静の香を洗つてふやふふりか
母のちり響くくさくさ菜飯の
静の香や庭の下よりほろけ
庭のちり響くくさくさ菜飯の
静くくさくさにならぬ不遠
正秀
知義
元峯
同隨
桃子

俗のまふ事と感懐慕うくもの風雅ふと

秋

家子帰る

又あて中ちておるえー客の社 肅山

誰氏乃妻の追言

秋乃おや紙燭よりしては洞 貞重

そお様はくくく田ちくぬ葉山系 全峯

雲み母屋の妻戸力ちるき何 嵐雪

とく火ふくはくく馬力ぬき力 兀峯

鬼神も修徳のち 調子うね 進歩

秋のくせぬおぬ帳のかくく 知多

堅男も力あくくくくくく 梅子

再はくくく中吹くく 黒口

茅葺や大くくくくく 流石

楠柳の枝くくくく 兀峯

床くくくくくく 隨意

まきくくくくく 龜龜

くくくくくく 其角

川筋力くくくく 其角

くくくくくく 其角

名月や縁よりくく 玄来

駒込鼻かくくく 兀峯

冬風の毛ぬくく 曲水

本居家子ぬく

木更る處と少りあつてもあつても
家より秋風さう——秋うら
挫くや牛といふくお撲と
夕陽や金お千たうあめひ
玉出たりや死んで後なる
人くのをと強くぬ月入る

この秋の月を採歌して
あ韓信をゆかり

唐相よりきくくからる麻衣も

仁意十七年回忌

あつたお力丁うきさう死さう
川流るに楫うきさうおさう

又玄
児貫
彫棠
元峯
進歩
一彫

元峯

貞直

仙化

冬

万句無つり

え——さほふ人のやうにけけらう
はるか——まは日ありや夕——
氷——はや中に捨てしも
口切やみ——め乃雲の空ふと

山中

ねえ——ねえい——るねね
さう雪ふけ——みるを懐との

田家

里より金乃見しゆも涼——
石地蔵い——ハ梅る丸雪う角

荷兮
キ角
元峯
洒堂
路通
元峯

咲翠
尖峯

風やばるあゝとて橋
 まがたをのれなる女方
 石臺のねえとておろ月
 細代ち大根盛をせうそり
 おろまや屋祇にみけ鶴の鳥
 茂門

芭蕉庵子

必多や見出せしむる所
 一多乃念併くハゆー細代古
 ものうみへんまほくも細代古
 言多の歩ぬを笑ふ川ちり
 淡路まで海もあふとあるさふ
 先杜をもーめは焼くもろあり
 元峯
 元峯
 元峯
 元峯

月室——八百五十の破山
武士とハ聖の蘇鉄ハ陸あう人
冬のおやハウ中はふる大めを
里おふちも中仕下にあうふたう
煉掃てるれとももとせ所う那
鴨／＼ハ一第ふりきさうしん

黄志
三夏
勅也
石亀
元随
氷花

旅行
數百里程多少難

笠乃結々口ありて風雪吹く南
嶺中構焼飯煮る乃くくく
陰州と云原走乃葉の影く如
元峯 洒堂 露沾

雜玉終

手三と

ち中花

新巻さうそおれや山おろし

嵐雪

る鯉——ちを泳ぐあはれ

元峯

出——より花を節くちあして

芙蓉

全

う——さやほろろふりむく朝日新

元峯

千里乃燕あふちあふち

琴藏

ちほふふ岬乃楓あふちあふち

祐佐

全

梅うねやよりほろろあふちあふち

元峯

東風ふり下り梅乃花

キ角

祀まのほろろめやり——き——

全

全勝別

いとゆつちるの尾髪乃あふちあふち

貞直

あふちあふち山陰の東風

元峯

う——そハ楓あふちあふち

進歩

う——ゆやかうはあふちあふち

其角

何をゆきそそそ窓乃あふちあふち

元峯

夕月にあふちあふち

全

全

何とね——かそそそ秋の雪あふちあふち

全

あふちあふち——もあふちあふち

一峰

岨乃井ハうこうそ月の缺てく山夕

五

ワさうも字は揺るう芳明な 不風

海あさぬち秋乃おの明 知至

雲あけ月おちうあつとかなうひて 兀峯

五

世のうまけと中に志あつるあけく

こついのうらる人々 詠通

あさ中氷とそむあ乃無

来もうあつとも枯芦 兀峯

あう山次より奥よりあさく 晩窓

○近き比世の都のうにひさと一あつたなるは

むとつもあつぬいふあつたうまうんと人のあつた

一ハふさうううと一あつた乃紀と人無に

あつたうらにあつたあつた必あつて人へあつた

を以てをあつたあつたあつたあつたあつたあつた

風程の蔵あつたあつたあつたあつたあつたあつた

ろに肩あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

○あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

備のあめり勇士元家子ハ風雅を抱懐秘を
有いて子月ハ何とある年ありちうまの
まゝまゝなり武家秘を仕方のあめいし
あこといりし社をとまゝに人にと
家目を悦むる己うてハまゝ下あるまゝ
様々様々なるもの也

水口

芥舟書

え禄六辛酉景五月

極のりた

備のあめり勇士元家子ハ風雅を抱懐秘を
有いて子月ハ何とある年ありちうまの
まゝまゝなり武家秘を仕方のあめいし
あこといりし社をとまゝに人にと
家目を悦むる己うてハまゝ下あるまゝ
様々様々なるもの也

ゆ 使

非 諸の三つの童子より来りて色を老人の
まゝしとてその人の松を引る事をふくめるは
只けるよとてなるやとてとてはしを先師より
——とて学業修むるをたゞとてとて識者の人々
ある一時の情をたゞとてとて輪人のよとてと
後者のふとてとて妙所の真よりとてとてと
なりとて色をたゞとてとてとてとてとてと
とてとてとてとてとてとてとてとてとてと
とてとてとてとてとてとてとてとてとてと

おをたゞとてとてとてとてとてとてと
今年乃非とあり今年のおととてとてと
てとてとてとてとてとてとてとてと

元禄十二就集巳卯春正月

あゝれを止うけくちありし

定家卿

法眼季吟黄門乃有ありとある人のつゝ
とくひ乃升よつとれり

あふを南むあゝとぞとるが 守武

晋其角曰荷う集う辞せととれと神祇
の正統とくめい境をゆく南まゝと鳴呼と

一時乃移るんととととあゝん

見と見ととつとれ乃とつと世と 貞室

あゝせむとやあゝ乃いり 堂 貞徳

花乃香をぬすくくつとる花乃卿 宗鑑

はくしゆく

その中の字宛八幡ととふの時 宗因

花乃と鐘と上野と浅くさう 芭蕉

詞以舊可用情以新為先と定家卿ハ云

いふいふ若く換骨奪胎乃法を立るこ

誰うつとつと俳諧ハ平話乃あつととを

本意うつとくあかうち古人ハことをもつ

すやとせ成翁乃ふささくとく窮巷僻地

よふ傾渚の艶言弄妓乃荒唐俚語俵詞

多う終て俳諧ふしといふ所の魔にあらず
そのまゝいふよりけきを借よふといふを
まづいふ事なれいといふをいふといふは
非とせむといふといふにのこりといふ詞
にあらずといふも情致いふといふ
○句城の事字眼を要いふ
あつとや吹浦をゆくゆへ深き
やといふ吹の字にあらずといふ深き
なりといふをせし福の字をせし
まゐるといふ口惜と或人のいふといふ

陶淵明の詩の神といふ千古の名ある事
詠集有佳色といふ佳の字ありといふ
撰集のねいふ事といふある集をする
やう余の句をいふやう色甚弱乃長仲
やうといふ
○月や海はむくの七小冊
やういふをいふやうやうといふ
ハ湖色乃あつといふといふ
らねといふハ吹把西湖比西子濃也相宜
東也といふといふといふといふ

まむい本をのけけきよく撰者といわれむと笑
東のくきとあり佛もくいつきん教を罪ま
このいま船とは聖者の歌あるをや

○ 名人乃古事をとめいふ古人乃力をうけく
句中無盡乃ちよありけし中人多うゆえ
くくくくくく先人の遺餘うく初稿類考
くくくくくくありふる

三升もの門きくくくくくく月 とき
くくくくくくやみ尺乃やめ州
卯の夜やくくくく抑乃ぬく

口

くくくくくくくくくくくくくくくく
初くくくくくくくくくくくくくく
是は古詩古歌本説物語をとりくくくく
あやまるといふ洗全朗く辟くあついつきき
くくくくくく乃る書をいふくくくくく
あやまるといふくくくくくくくくく
あやまるといふくくくくくくくくく

○ 泉新乃くをきく事ありくくくくく
流み遠愁外舊山青と筆筆驛くくくく
をきくくくくくくくくくくくくくく

○あふふつあふあり 仇諧あふあり 味ふた
を味やうく 仇諧あふをあふ 味ふ

蚤虱る乃尿こくまうと 芭蕉
年頭ハカと乃とちめ乃うハカ 酒堂
松茸や人よとく 鼻乃先 去来
更あふ亭主とまハ新酒ハ 其角
争やそ乃とさう 湯との 浪化
庭ハくくる乃年 夜をけ 露川
まあハ一問乃およくる乃尿 水 飄
兼年も切花ハハの才とぬ 探志

親仁と記さるるさふみそさふ 乙訓
故き火や女乃荷ふとをさふ 風國
京船乃志所とく 春の月んハ 嵐雪
血をふく 身と及んハ 故のふさ 丈艸
猿引ハ猿乃小蛇をさふとさ 芭蕉
出羽や照日と下 蛇をさふと 知足
流る来く 枝ふや 雛乃とさ 車来
初雪や雪庵とまうり 芭蕉
升乃座と 燭をさふ 約能うね 為有
物々を見ふハ 旅乃 拾う 風睡

夕顔は次郎の遠く小あゝる 丹山
 佛より衣よりをわたりうん 一本
 藤乃葉より藍色より田植うれ 可陰
 草種や花乃よりりを素ありく 芭蕉
 糸糸ひふにふふ乃中より家 朱拙
 あさうな乃よりぬきより進上 万手
 草乃葉の折よりつとくぬ乃風 紫道
 作向よりくもくや比乃足 土方
 物乃挑灯くもる田畠 帆社
 いふはまよりくまよりくをぬい 三日月

丹山
一本
可陰
芭蕉
朱拙
万手
紫道
土方
帆社
三日月

深川の八景

早雲く雲乃袋や投頭巾
 かり碁乃見や浦より雪見穴
 草庵とおりと年乃炭火根
 ふうふまときんく離く蛙うれ
 ○感懐よりるうい本懐よりく仇隙よりれ
 やあつらつらよりハ能はるよりくあ情よりー
 案よりれより本懐よりーハ能く易く仇よりぬハ
 やまよりーハ能くよりー今乃目眼をよりひより安
 排を強よりれをよりぬよりれ事よりー周詩より

感懐より興まる玉捨に其人よりあはれ

源川田園のけ

葦や見ても久きあふれ 色蕉

あふれぬれとあはれとれ 朱拙

そと紙系乃何ふれとやねの風 路園

義虫乃家ハ強くとくも 亀 凡義

崎陽と旅寐のけ

故市とも今ハかり寝や寝りる 去来

松風も父ハ寝世乃のかりと那 文考

月日をもうくる年と枯野ハ 尼 智因

昔よりほつと海ありやハ乃言 大行

こやあつる屋も様もねとる 三日月向 文考

あつるや苗と吟曲ハ海苔は 文考

源川舊庵より入る

空よりいふとつハ板乃結ととも 惟妙

○平白いふとつハつとけとつとつと

けとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつと

うに軽くきよとわく人年ふあふうにきよなる
後白やもきよなる——きよをきよ氣象
乃師をきよい——先師乃かくあされ——な
うふう人ふあふうきよ人をきよあふうはう
われや——きよい——うのきよい——うの中古の
宗因門人のきよいなる事多きあふう——
素少きいなるきよいなるきよい陳云已にきよ
とも古人のきよをいふうきよい——

○或人宗長に付るいふ——ゆるうう——やと向
うふうなる連歌の他人の中よれ——きよい

きよれと下心よくきよをいふううきよいあう
下ものの親類の中きよい——いふうきよい
——きよい——下心よくきよい——きよい——
きよい——きよい——きよい——きよい——
他人乃中より——きよい——

○中古の例諸いふきよい——きよい——風俗いふきよ
いふ其きよい——きよい——中古の例未熟なるきよ
きよい——きよい——きよい——きよい——
情と其角う雑漢——きよい——きよい——其
古きよい宗因ういふ

遠く唐桑丸娘乃森見分
蒼麦切乃先一口やちう平れ
杜宇唱やら泣乃る車
見乃る句ハ南宮ふきりとも作ららん
とらん家因をく南宮ふきりとも流
乃乃押うけりまやちうも角よと風
陸ハ根抵乃あはゆか
○李白は外乃風流を均く道ふちうと
宋儒乃評せられハ天機を執るもこと
あり性然る諸品は跨く句をさるくこと

「十」

くもあはくよさのうらみし
外はあつゝしゝのうらみし
あはくこのねえをひくこと
南都乃きり遠く
本はくらん南宮ふきりとも 惟然
二本をく
光来乃多い所く花乃ま
松くま
松くまや月あき星もろく死
源川乃平る

福々乃願ふるまゝにうれ 朱批

偶作

その中いゝと雀の輪ねけりや
雅乃唱けよと教ふるに
素蓬

諸方の十八樓の記あり略之

芭蕉を人乃遺稿もよみ好むに許す
勝もよみは洛乃風国泊船集よみしとれ
そとひつゝ賛さん伊陽の義乃熟地多れ
そとひつゝ方猿籠のいけみちとくちとる
ふあふかりふとれとくむの鳥有とふり

十四

うらとて歌仙をおくゆふとくまふ
つゝ進加ふ

戊七月廿八日猿籠亭

夜席

あつゝとくすゑの海乃雪ふ式 猿籠
虎乃かゝるをあくる栗乃穂 芭蕉
和月歌集よみ進はつゝ 配力
系乃燈つゝ暖簾の綴 金翠
かつゝとく楊をよみ雅乃死 土芳
窮屈さうよとるあるなり 卓袋

仕仕くくく人聲方乃客
田を抄る向迎江乃稿の出来
天氣のあ——宵乃うみより
放

右俳諧歌仙者翁在世元禄六癸酉冬於芭蕉庵真
行也炭依集先師不滿意句多故不滿韻
終止畢然今人紋肝膽耽詞花不及師妙
術也尤於當時風流者語意可增減處
覺候畢雖久藏頭陀袋門人梨里依數奇
深切附与之聊無遠亂者也

享保戊戌孟春

樽野坡



